

---

# 東方人鳥録

カルピスオレンジ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

東方人鳥録

### 【Nコード】

N4763Z

### 【作者名】

カルピスオレンジ

### 【あらすじ】

気がついたら人間じゃなくなっていた俺。どうしようかと悩んだものの、とりあえず蟲とかじゃなかったんでいいやと思い、そのまま生きていくことにしました。これはそんな俺の、何の変哲も無い物語。

## 序章〱何の意味もないプロローグ〱（前書き）

勢いで書いてみた今回の小説。

更新は確実に遅くなるし、内容も薄くなっちゃったりするかもしれません。

長く優しく温かい目で見守ってくださいお願いします

## 序章 何の意味もないプロローグ

全ては、あの日から始まった。

いつも通りの朝。いつも通りの学校。いつも通りの友達とのバカ話。いつも通りの退屈な授業。いつも通りの昼下がりに。いつも通りの寄り道。言い始めたらキリがない。

ただ、いつもと明確に違ったのが、空が紅く染まる夕暮れ時だった。

下校途中に寄った本屋の帰り。特に何も買わずに面白そうな小説を流し読みしただけなので、荷物はいつも通りほぼ空っぽのカバンのみ。沈み行く太陽の、それでもしぶとく発せられる太陽光線を体に浴びながら、家までの道をとぼとぼと歩いていった。

その時だった。

「ねえ、お兄さん」

と、不意に背後から声をかけられたのだ。俺は特に何も考えずに振り向いた。

そこにいたのは幼い少女、つまりは幼女。金色の長い髪に黒いドレスがよく見える。

この道は一本道で、たった今通った所に誰かいるのはおかしいとか、こんな小さい子がこんな時間に一人で何をしているのかとか、

さっきの言葉は十中八九この子が言ったのだろうけど、それにしてはこの頃のこの子ども特有の舌足らずな感じが無いとか、どうして俺を呼び止めたのだろうとか、色々疑問は浮かんできたもの、とりあえずそれを全部まとめて放り投げ、

「何か用かい、お嬢ちゃん」

当たり前のように言葉を返した。

ロリコンとペドフィリアを併発させているこの俺が、可愛らしい幼女に話しかけられて反応しない訳が無い。

いやいやそれにしても、見れば見るほど愛らしい。まるでお人形さんみたいだ。本当に良く出来ている。

…気持ち悪いくらいに。

「ねえ、お兄さん」

もう一度少女が言う。どう見ても、彼女の唇は動いていないけど。

「好きな動物って、なに？」

……動物か……いきなり言われてもぱつと出てこないよな。無難に、犬猫とか言っとけばいいのか。もしくはこの場合、人間というやや変化球気味の回答は認められるのだろうか。

くだらない事を考えて首を捻る俺を、お人形のような女の子はじっとみつめる。ガラス玉の瞳で見つめる。

ふと、丁度横の扉にポスターが貼ってあるのに気付いた。昨日は無かったはずだから今日貼られたのだろう。近々オープンするとい

う水族館のポスター。デフォルメされたキャラクターと動物の写真。  
……うん、これでいいか。

ポスターに向けていた視線を少女に戻す。目を離しているうちに、もしかしたら消えてるんじゃないかなー、とも思ったがそんなことは無いらしい。

まあそんなことはどうでもいいんだ。少女の質問に答えよう。上手く誘導すれば一緒に水族館に行く事だって出来ないこともない。

「俺が好きな動物は、ペンギンだ」

「ペン…ギン？」

こてんと首を傾げる少女。これで首が外れたら面白いのに、なんて思いつつ、ポスターを指差して「これだよ」と教えてあげる。ふんぶん、と確認するように写真を見て、少女は、

「じゃあ、これでいい」

言葉が終わると同時に少女の姿は陽炎のように消え去り、そして、俺の視界に何も映らなくなった。

序章〜何の意味もないプロローグ〜（後書き）

次回の投稿、未定！

## 1羽のペンギン、大地に立つ

目の前で轟々と荒れ狂う雪。分厚い雲によって覆われた空。寒風に耐えるように身を寄せ合う黒白の羽毛たち。そしてその羽毛の足元で呆然とする灰色の俺。

つまり、おっほん。

目が覚めたら、体がペンギンになってしまっていた！

……てな感じですよ、はい。俺にもワケが分かりません。

いや、犯人は分かっているんだ。犯人はあの幼女に違いない。おのれ、次会ったら胸揉んでやる。まあ、揉めるような質量も無いだろうけどな！

おっと、話が逸れた。いけないいけない。現実逃避はひとまずやめよう。

現状において確かなことは、俺の体が以前のものとは大きく違うということだ。視線が低すぎるし、手も小さい羽。歩こうにもチョココチョコとしか歩けない。ええい、もどかしい。

上を見上げる。視界にこれまた小さい嘴が入るが無視。出来るだけ首を上を傾けると、どうにか他のペンギンたちの顔が見える。こんだけ高いって事は、俺はまだ離れてることなんだな。

というかペンギンがいるって事は、ここは南極ということになる。動物園とかじゃないってのはなんとなく、空気で分かる。

…これは一体どういうことなのだろうか。人間からペンギンに。日本から南極に。どちらか一方でも有り得ないことなのに、それが



同時に来るとか。冗談でも笑えない。精々苦笑いだ。

さつきは軽い感じで「犯人は幼女」とか考えたけど、果たしてそれはどうなのだろうか。確かにおかしな幼女だったが、こんなことが出来るのだろうか。そして、俺をこんな目に遭わせた理由とは…

…？

「……………」

……………無理。分からない。というか考えもつかない。さらに頭も回らない。お腹減った。

考えるのは後からでも出来る。でも、この空腹はどうしようもないんだ。だから。名も知らぬ親よ、俺にご飯を！

ぴーぴー鳴いてたら、何処からかやってきたお母さんらしきペンギンがミルクをくれました。お腹は膨れたけど、代わりに何か大切なものを無くした気がする……………

ペンギンになって、永い年月が過ぎた……………気がする。時計なんかねーから分かんねーんだよ。

具体的な数字なんかは分からないが、まだ小さな雛だったペンギンが成長し、毛が生え変わり、番をつくり、そして新たな命を生む。このサイクルが優に200回ほど繰り返されるのを見てきたから、そのくらい。

その間俺は何をしていたのかというと、まあ泳いだり、餌をとったり、適当に歩き回って探検したり、エンカウトしたシロクマやアザラシ、珍しいところではシャチなどと戦い、勝利しては肉を美

味しく頂いたりしていた。

……いやさ、うん。おかしいのは俺も知ってる。仕方ないじゃん。他にすることもなかったんだから。一人ぼっちだったし。

俺の事を周囲が不審に思い始めたのは、恐らくだが生まれてそこそこ日数が立った頃だと思う。その時では他の子ペンギン達は体も成長し、早い固体では体の毛が生え変わっていた。対して俺は全くといっていいほど成長せず、いつまでも雛の状態に近かったのだ。

ペンギンに限らず、野生の動物達というのは移動を繰り返す。外敵から身を守るために。サイズが小さい、つまりは歩幅が短い俺は、よほど頑張らなくては置いてけぼりにされてしまうのである。最初のうちには両親が助けに来てくれたが、親が老い、そして死んでしまつと、それでもまだ小さかった俺を迎えに来てくれるような奴はいなかった。俺は一人になっていた。

そして、気付いた。当然のように天敵である動物に襲われた時、とにかく我武者羅にあがいていたら相手を殺していたことに。それが出来るほどの力があつたことに。

力がどのくらいかを知るため、同時に日々生きていく糧を得るため、俺は海に出た。滅茶苦茶すいすい泳げた。

身体能力もさることながら、それとは別にもうひとつ、体の中に得体の知れない力があり、それは月日が過ぎていくことに強くなつていった。ある日思い切つて、その力を体全体に流すようにしてみたところ、もう馬鹿みたいに強くなった。ドリルくちばしでシロクマを貫通できるほどに。

それだけの力があつたことが、俺が南極の過酷な生存競争を勝ち

あがってこれた理由だろう。今ではもう、ここら辺の動物は俺を見るだけで怯えて逃げるくらいだ。俺も鬼ではない。立ち向かってこないというならこちらから追いかけることもしないのだ。

強くなり、また強くなり。それでも成長が芳しくないマイボディにうんざりしていたが、ふと、思いついた。天啓ともいうべきか。

そうだ、日本に行こう、と。

うん。案外悪くない。今となつてはペンギンの身だが、元はただのジャパニーズピーポーだったんだ。ここでやることが無いのなら、故郷に帰るのもいいではないか。

雪原のど真ん中で座り込み、短い両羽を組んで考えていた俺は立ち上がり、俺の事を知らないのか、はたまた油断している今なら殺れると思つたのか、忍び足で歩み寄っていたアザラシを秒殺してその肉を腹にたらふく詰め込み、全速力で滑りながら海へと向かい、勢いを留めることなくダイブした。

そして、泳いだ。適当に。そして、迷った。必然に。

方角を確認しなかつたのが敗因だったか、泳げども泳げども陸が見えてこない。3日間ほどあても無く泳ぎ続けてから、ようやく太陽を目印にすることを思いつき、さらに泳ぎ続けること約一週間。俺はようやく陸地を見かけた。というか村らしきものもあった。

水面から少しだけ顔を出し観察してみると、住民は全員黒髪黒目。他のアジア系人種という可能性もあったのだが、俺は直感した。「ああ、日本人だ」と。安堵してあやうく溺れるところだった。

海からいきなりペンギンが出てきたらビックリするだろうと思、夜を待ち、村から完全に灯りが消えたのを確認してから俺は上陸し

た。久々の砂の地面の感覚に、不覚にも泣きかけた。

ここまでくるのに約十日。不眠不休泳ぎ続けた。いくら身体能力を強化していたとしても限度がある。俺はかなり疲弊していた。ふらふらとおぼつかない足取りで、俺は休める場所を探した。

不意に、鼻腔に甘い匂いが漂ってきた。どこかで嗅いだ事があるような、とても懐かしい香り。ふらふらと吸い寄せられるようにして匂いの基へ近づいていく。

疲労はピークに達しており、視界はもう映っていない。一番匂いが強くなった地点で、俺は力尽きるように倒れた。

あ、この匂い。……花の、香りだ…

2羽ははじめまこて (前書き)

花の頭が世紀末

## 2羽ははじめまして

「はっ、はっ、はっ」

若草が萌える草原を、彼女は全速力で駆ける。

少女　後に風見幽香と呼ばれる花妖怪である彼女は、自身の持つ能力によって花々と深い関係を持っている。そして今、その能力のお陰で聞こえてくる花たちの声がおかしいことに気付き、そこへ向かっている。

始めのうちは距離があつたせいではつきりとは聞き取れなかったが、徐々に近づくにつれて花たちの声が鮮明になってきた。

『ヒヤッハー！』

『きた！今ちよつとかすつた！これで勝つる！』

「……………」

あの綺麗な花たちがこんなことを言っているとは信じがたいが、これはこんな支離滅裂なことを口走るほどの状況に彼らが置かれているんだ、と彼女は考え、さらに走る速度を上げた。

これから先の未来において、強者との戦いを酷く好むことになる彼女だが、彼女の持つ能力は戦闘には不向きであり、行われる戦闘は全て彼女が持つ妖力や身体能力によるもの。今はまだ成長途中ではあるが、それでも彼女の脚力は普通の人間などとも及ばないものだった。

彼女が通り過ぎるその勢いだけで周囲の草花が千切れてもおかしくは無いのだが、妖力を、こう…いい感じに運用することによってそれを防いでいる。急いでいるときにそんなことをするのは大きな足かせになるはずなのだが、彼女はそんなこと気に留めた様子も無

い。それほどまでに彼女は草花を愛している。

故に、その草花に危害を及ぼす者がいれば、彼女は一切の情け容赦なくその者を叩き潰すだろう。

絶え間なく頭に響く花たちの絶叫や嬌声に歯噛みしながら、ようやく彼女は声を上げていた花たちの元へとたどり着いた。

そこでは、

『キャッホー！モフモフしてるモフモフ！』

『なにこれかわいい』

『ああ！今！今羽が私の双葉に！』

『ずっとお尻の毛が当たってる俺は勝ち組』

『おいそこかわれ』

「……………」

花たちの叫びがもう理解不能というか、脳みそが自動的にシャットダウンするくらいの内容になっているのはさておき。注目するべきは花畑の真ん中で丸くなっているあの一匹の生き物だろう、と彼女は思考を纏め、花を一輪も潰さないように気をつけながら近づいていく。

「うわぁ…」

思わず声がでた。

ここらでは見たことの無い生き物だった。鳥だろうか、左右にある羽がそうであることを表しているが、その丸みを帯びた体はお世辞にも飛ぶのに向いているとは思えない。体の前面は白い羽毛に覆われており、頭頂部は黒く、背中周りや羽は灰色。ただでさえ小さいその体躯をさらに小さく丸め、時折寝返りを打ったり羽を動かしたりしている。その度に周囲の花たちが喝采を上げているのは気の

せいだろう。

とにかく、その鳥の姿は、

「かわいい……」

今までは綺麗に咲いた花にしか抱かなかった感情だが、この鳥にはそれと同じ、いやそれ以上のものを感じた。

「……………」

鳥の姿を見つめながら何かを考える少女。やがて、

「…こんなところで眠って、他の動物や妖怪に襲われたら大変だも  
んね」

誰にとも無く、ともすれば言い訳のように呟き、そっとその生き物を抱き上げる。フワフワの手触りを楽しみつつ、ブーイングを上げる花たちを一切無視して帰路をたどり始める。

その足取りは、とても軽やかだった。

花の香りがする。

寝ぼけてまだあまり回転しない脳みそにただそれだけが浮かぶ。甘くて優しいその香りに更なる眠りへと誘われるが、なんとか堪える。

いつもより重たく感じられる体をどうにか起こし、羽を振り回したり腰(?)を捻ったりして覚醒を促し、ふと気付いた。



あれ？ここどこだ？野外で眠りについたはずなのに、どういうわけか建造物の中にいるんですけど。なんかテーブルっぽい台の上に載せられているんですけど。

「うふふ」

なんか緑色の髪の毛の女の子に笑われてるんですけどおおおおおおおおおおお！？

おおおお落ち着け俺、クールだ。KOOL:じゃない、COOLになれ　えーっと、ヤバイ自分の名前忘れた。シヨックで頭が冷えたからよしとする。

うわー。うわー。恥ーずーいー！。さっきの動作なんかペンギンボデイでやってたらそりゃ愛くるしくて笑われるよ。

ふう……まあいい。とりあえず、この緑の髪の毛の（緑？）女の子が、野外で寝転がってた俺を危うく思っただけでここまで運んでくれたんである事はフィーリングで把握したので、そのお礼とはじめましてを併せてお辞儀をする。

「え？　あ、ご、ご丁寧にどうも」

やや慌て気味にお辞儀を返す少女。かわええな。

その動作にほんのりしていると、少女は笑顔で、

「鳥さん。私の名前は幽香っていうの。よろしくね」

「くあっ」

と返す。ペンギンの鳴き声なんか知らないので適当に。幽香、か。いい名前だ。

自分の言葉を理解してくれたのが嬉しいようで、幽香はますます笑顔になる。そして、

「私、これからご飯なんだけど、よかつたら鳥さんも一緒に食べる？」

と訊いてきた。

ふむ。ご飯か。南極を出発する直前に食ったアザラシはとくに消化されてるし、海を泳いでるときも早く陸にたどり着くのを優先して食事は二の次にしてたから魚を二、三匹。それも最後に食ったのは大体二日前。俺の胃袋は現在進行形で空っぽである。

生き物にとって、食事というものは非常に重要なものである。体の活動に必要であるというのは言わずもがな。それだけではない。腹が空いている空いていないというのは、精神状況にも影響を及ぼすものだと思う。

それだけではない。食べるものの味も重要だ。美味ければテンションは上がるし、そうでなければそれは下がる。そういうのは割りと大切なところだと思う。だから、味なんか関係ない。腹が膨れればそれでいい、とか言ってる人達は人間やめてると思う。というか食べてる食材に失礼だ。絶食してとつと死ねばいい。

と、まあ。いろいろ言葉を並べたわけだが、結局のところ何が言いたいのかと言うと、俺はお腹が空いているのであって、

「くあ

もう一度、お辞儀をしたのであった。

4羽くちよなひは言わない〜(前書き)

てけとー

#### 4羽くさよならは言わないく

燦々と照り輝く太陽が昇る青空の下。東方に位置するある島国  
まあ日本なのだが、今はまだそんな名称ついていないからいいだ  
ろう。

ともかく。その国のとある地域の一角。山間にある森の開けた場  
所に、色とりどりの花々が咲き乱れていた。

季節の花からやや外れた花も無秩序に並んでいるが、そんなこと  
は気にならないくらいの見事な咲きっぷりであった。

そんな花畑の中で、

「  
」

一羽のペンギンが、鼻歌を歌いながら器用に如雨露で水遣りをし  
ていた。片翼で如雨露を持ちもう片方の翼を腰に当てながら水をま  
くその姿は、ある種の風格すら漂わせていた。

このペンギンがこの花畑の持ち主と会ってから早数ヶ月。一体何  
があったのか、あれからその持ち主の家に住まわせてもらっている  
のだ。まあ双方合意の上だから問題ないだろう。

三食きちんと食べられてたまにおやつもでる。布団は柔らかいし  
周囲の光景は綺麗。おまけに同居人は美人ときている。まったくも  
って羨ましい。幸せな奴はみんな死ねば…なんでもない。

そんな幸福なペンギンは如雨露の中の水がなくなるまで花たちに  
水を振りまくと、一輪の花に近づき香りを嗅ぎ、嬉しそうな声を上  
げる。ちなみにこの瞬間、聞こえる人には聞こえる声で周囲の花た  
ちが騒ぎ出したのは完全な余談で、これを聞いたとある少女が頭を

悩ませたのはこれまた余談である。

一通り花の匂いを楽しんだペンギンはよちよちと短い脚を動かしてその場を離れ、また如雨露に水をたつぷり入れ今度は別の花に水をかけ始める。

この水遣りのお仕事は、こんな恵まれた生活をしているだけじゃダメだと考えたペンギンが、同居人の幽香を身振り手振りのボディランゲージでどうにか説得し、ようやくと手に入れた仕事だ。衣食住の世話をしてもらってる以上これくらいの恩は返したいという考えだ。

けれど、

「鳥さん。お昼にしましょ」

「ペンッ！」

ご飯と言われてこんなに嬉しそうに家へと帰っていく姿は、同居人というより ペットだった。

「鳥さん、おいしい？」

「ペン」

あ、鳴き声はペンにしました。ちょっとでも個性が欲しかったです。

それはさておき。

時刻は昼時。お天道様が空の天辺にある時間。花に囲まれた小さ

な一軒家の中で、緑色の髪の少女とペンギンが食卓を囲むという奇天烈な光景。よくよく考えると違和感有りまくりだなオイ。

食べるメニューは一緒。なんかの肉の丸焼きです。

最初の頃は幽香が俺に肉類か穀物か、どちらを食べさせればいいのか悩んだりしていたが、そこは好き嫌いの無いよく出来たペンギンである俺のこと。どちらも問題なく啄んでやった。

今だって。骨付き肉を両羽でしっかり掴んで、漢らしくがぶつと齧り付いて…あれ？

向かいに座る幽香はそんな俺の様子を微笑ましそうに見ている。やだ照れる。

食事のときは大体こうだ。俺がたどたくも飯を食べる光景を幽香が見て楽しんだり、もしくは幽香の話を聞きながら俺が適当なところで合ペンと言ったりいの手を入れたり。

一人と一匹だけしかないが、そこには確かな家族の温かみがあると俺は感じている。

いつだったろうか。出会ってから数日ほど幽香と一緒に生活した頃、ふと俺は幽香の家族は何処にいるんだろうかと考えた時があった。昔の日本なのだから日数を掛けての狩りやら商売からあるのかと思っていたが、時間が経つにつれてその線は薄いと考えるようになった。なぜなら、幽香の家には一人分の食器しかなかったからだ。いやまあ俺が来ていくつかは増えたけれど。それまでは一人分しかなかった。つまりは一人で暮らしていたのだと俺は気付いたのだ。これは一体どういふことなのかと頭を悩ませたり悩ませなかったりしていた俺だったが、すぐに答えを得ることが出来た。

きっかけは、そう、ある風が強い日のことだった。

いつものように惰眠を貪っていた俺はなんとなく目を覚まし大き

く伸びをした後、出掛けに幽香が用意してくれた飯をもそもそと食べている。その時だった。

ドゴン！と大きな音が家の外、聞こえてくる距離から考えるに花畑の外周付近から届いた。

瞬間、幽香に何かあったのではないかと思っただ俺が食事を放り出して外に飛び出ると、幽香が戦っていたのだ。相手は全体的に牛っぽいフォルムの明らかな化物。二足歩行の筋骨隆々。ミノタウロスもどきって感じだった。

本能的に、俺はそれが妖怪であると察することが出来た。同時に、その牛妖怪を一方的に攻め続けている幽香もまた妖怪であると判断した。

啞然とする俺の前で、幽香は一瞬で相手に懐にもぐりこみ、右スレートで牛の腹に風穴を開けた。その時幽香の拳に何かがあることに気付いて、そしてやや薄いがそれがあの二体の周囲に漂っているのにも、俺が南極で使用していた得体の知れない力が正にそれであることにも気付いた。

そして、俺は自分が妖怪であることを知った。

一口に妖怪といってもそれは大きく二つに分けられる。元々ある何かが年月を重ねて変化したものと、最初から妖怪として生まれるもの。ペンギンの両親から生まれながら一向に成長することが無かった俺は多分その中間に位置するもので、幽香は後者なのだろう。

詳しい成り立ちなど沿っているわけも無いので、妖怪がどう生まれるのかは分からないが、幽香が妖怪であるならば一人で暮らしていた説明もつく。あれだけの力を出すことが出来るのだ。人里で受け入れられるわけも無い。それ以前に、良くも悪くも幽香は花を育てることにしか興味は無い。煩わしい人間の中で住むくらいなら、

ここのような山の中で花々に囲まれている方が幸せなのだろう。

そんな幽香が何故俺をここにいさせてくれるのかは分からないが、だがまあ、居候させてもらっている身分としては余計なことに口出しするつもりは無い。せめて幽香を少しでも楽しい気分にならせてやるのが一番だろう。

楽しませることに關しては尽力を惜しむつもりは無い。だって可愛いもん。美少女だもん。今も可愛いし、将来は美人になるであろうことが確定してるし。綺麗なお姉さんとか大好きです。罵って欲しい。

「ペンペン」

食べ終わった後は手を合わせて挨拶。基本だよな。合わせたのは羽だけ。少し遅れて食べ終わった幽香が自分のと一緒に皿を持っていてくれたので、することがなくなった俺はぐでーっとテーブルに突っ伏す。しかしすぐに戻ってきた幽香に抱き上げられる。そしてそのまま膝の上に。

「うふふ。ふわふわ」

「…ペン」

最近の幽香のお気に入りはこちらにして俺の羽毛を撫でること。別に撫でられるのが嫌ってんじゃない。むしろ丁寧に触られるのは気持ちいい。だんだん眠くなってくるし。

でもな、こうやって撫でられて眠くなるっていうのは…ペット、って感じがしてなんか…

「もふもふ」



……ま、幽香が楽しそうだから、いいか。

…む。眠く…なつて…き……………ZZZ

『 ツ！？』

「！」

ガバリ、と。かけられていた毛布を跳ね除けて起きる。

なんだ…凄く嫌な感じがする。どうしてかは解らないけど、胸騒ぎが止まらない。

そつだ、幽香がいない。いつも通りなら、眠った俺を置いて花の様子を見に行っているはずだ。目を向けた窓から見える外の景色は、胸糞が悪くなるような曇り空だった。

『 キヤアッ！』

「ペン！」

外から聞こえてきた幽香の悲鳴に、我を忘れて駆け出す。ペンギンの脚がいくら短くても、妖力で強化して跳躍すればそこその速さで動ける。体当たりするように扉を開けると、

「ぐっつー！」

丁度幽香が吹き飛ばされていた。地面を無様に転がりながら、それでも鋭い目で一方を睨んでいる。

視線の先にいるのは人型の妖怪。人間と違うところがあるとするば、それは腕が六本あることだろうか。恐らくは、蜘蛛の妖怪。身

に纏う妖力は幽香のそれよりも強大だった。  
蜘蛛が言う。

「ふん。強い妖怪がいると聞いてやってきたが、この程度か」  
「舐め……るなあ！」

咆えると同時に疾走する。驚異的な速度で相手に接近しそのまま拳を振るう。が、

「温い」

そこら辺の妖怪ならば屠れるであろう一撃を、蜘蛛は自らの腕の三本を使って止め、返す刀で薙がれた幽香の脚を一本で防ぎ、反撃に二撃、拳を叩き込んだ。

「が…っは」

またも吹き飛ばされる幽香。口の端から血を垂らしながらも、再び立ち上がる。

その後には、傷一つ無い花畑があった。

愕然とした。自分よりも強い敵と相対しながら、それでもアイツは花を守るうとしていて。

いやバカだろ。そう思いながら、俺の脚は自然に動いていた。見るからに幽香は満身創痍。恐らくはあと一撃で沈むだろう。それを解っているのか、蜘蛛はゆっくりとした足取りで歩を進める。対する幽香はもう立つことすら儘ならないようで、足を震えさせながら動かない。

もどかしい。僅かずつしか進むことの出来ないこの体が恨めしい。

そうだ。動物の妖怪ならば人に化けることが出来たのではなかったか。確か出来たはずだ。よし成ろう。

正直な話。俺は人間がどういう姿かを忘れていた。元人間の癖におかしな話と思うが、それだけペンギンでいた時間が長かったのだから日本に来て人を見たとき軽く泣きそうになったんだ。

すっかりさっぱり忘れていた人体だったが、ここしばらくの間幽香と過ごして思い出せることもあったし、新しい発見もあった。どんなこととは言わないけど。とりあえず、何回か幽香と水浴びを共にしたことは絶対に忘れないでおこうと思った。

走る。走りながら、人型になる方法を模索する。全身に妖力を通す。頭の前からつま先、毛の一本一本に至るまで満遍なく。そして妖力と体を出来る限り近づける。感覚的にその差がほとんどなくなった時点で、妖力を大きく伸ばし膨らませ人の形をとる。そしてなんだかんだふんにやらかんたら頑張つて努力して精進して切磋して人になった。

今までとは段違いの速度で蜘蛛に迫り、気付かれた瞬間、全力で横っ面を殴り飛ばした。錐揉みしながら飛んでいく妖怪を確認し、幽香に目を向ける。案の定、驚いていた。

「あ、あなた…何者？」

言われて、一先ず自分の姿を確認する。

とりあえずは、男だ。参考にしたのが幽香だったからもしかしたらと考えていたが杞憂だったようだ。ちゃんと感覚がある。しっかり付いている。よかった。本当に良かった。

何でかコートを着ていた。意味がわからない。着心地は悪くない

のでよしとする。

そこまで把握した時点で、蜘蛛がむくりと起き上がった。

「中々の拳。強いな貴様」

今の一撃で取れたのかペツと歯を吐き捨てながら、痛がる素振りも見せずに話しかけてくる。俺は、

「…すまない。多分手加減は出来ない」

「何を」

言いかけた蜘蛛は次の言葉を繋げることが出来なかった。それよりも先に、俺が蜘蛛の体を裂いたからだ。五指に妖力を込めて振るう。それだけで蜘蛛の体はばらばらになった。

人の姿になってから、どうにも押さえきれない量の力が俺の中で蠢いている。蜘蛛よりも幽香よりも強いその力は、蜘蛛を殺してもそれは解消されない。当てもない力の中で暴れている。

…これは本格的にヤバイ。この力を幽香に向けてしまおうかと一瞬でも考えてしまった。でも、それだけはダメだな。

……………仕方ないな。

「待って！」

正面にある森へ向かって一歩踏み出した俺の背中に幽香の叫びがかかる。思わず足を止めた。

「あなたはもしかして…鳥さん？」

「…そうだよ」

静かに、できる限り優しく言う。振り返りはしない。そうしたら

決心が鈍るから。

「…人に化けたのね」

「ついさつき出来るようになった。早く走りたかったんでな」

そう、と小さな眩きが耳に入った。思えば、こうして幽香と会話らしい会話をするのは初めてだな。

「助けてくれて、ありがとう」

「気にすんな。こつちには世話してもらった恩があるんだから」

そろそろ限界だ。これ以上ここにいと抑え切れなくなる。そう判断した俺は、歩みを再会する。

「ねえ」

またも話しかけられて足を止めざるを得なくなった。女の子に話しかけられて無視できるほど俺は酷い男じゃない。

「名前、教えてくれる？いつまでも鳥さんじゃ締まらないし」

名前、か。元の名前は忘却の彼方なので、新しいのを今考えなきゃいけない。どうしようか。

やっぱりペンギンから連想したいな。ペンペンとか？……別に温泉が好きってワケじゃないから却下だな。じゃあシンプルに、

「ギンだ」

「ギン…いい名前ね」

「お前もな」

ありがとう、という声を聞いて、今度こそ俺は前へ進む。

「…ねえ、また会えるかしら？」

「そうだな…お前がこれからも綺麗な華を咲かせ続けたら、もしかしたら身に来るかもな」

今度は止まらなかった。幽香も何も言わなかった。多分俺の考え  
ていることに気付いて、それでも何も言わずにいてくれたんだろう。

……「…つたく、何があるがとう、だ。その台詞は俺のだったの。」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4763z/>

---

東方人鳥録

2012年1月6日20時50分発行